

## 日本一短い手紙

福井県に、日本一古い天守閣をもつ霞ヶ城（丸岡城）があります。そこに「一筆啓上火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ」の石碑があります。後に城主となる本多成重（幼名仙千代）の父が、陣中から妻に送った手紙。この手紙にちなみ、1993年から「一筆啓上賞」が丸岡で開催されています。その作品は丸岡城に展示されるとともに、中央経済社から出版もされています。



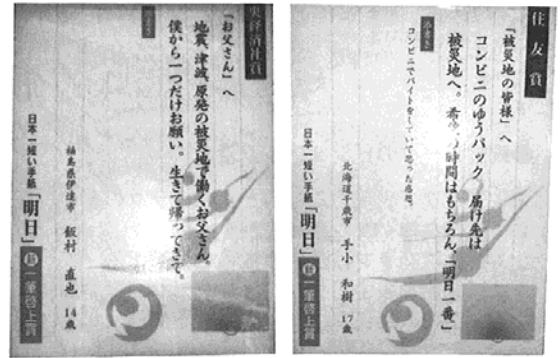
中嶋哲夫の「人事も歩けば」



2012年4月に表彰された「第9回 新一筆啓上賞」のテーマは「明日へ」でした。東日本大震災から1年ということもあり、応募作品には、震災の影響が色濃く感じられます。そのなかに、筆者の目を奪って離さない作品がありました。

「おとうさん」へ  
—地震、原発、津波の被災地で働くお父さん。僕から1つだけお願い。生きて帰ってきて。—

福島県の14歳の男の子の作品です。作者のお父さんは公務員の方なのか、消防団、建設業、あるいは自衛隊の方なのかもしれません。職業はわかりませんが、被災地の第一線で復旧の仕事に取り組まれているのでしょう。そのお父さんの務めを認めつつ、心細さ



▲受賞作品の一部

や親への愛情が凝縮されていると感じます。涙ぐみながらしばらく見ていました。自己実現といったことばで表現してはいけない、仕事の切なさや尊さが伝わってきます。

もう一つ紹介します。北海道の17歳の男性の作品です。

「被災地の皆様」へ  
—コンビニのゆうパック。届け先は被災地へ。希望の時間はもちろん「明日一番。」—

この作品には、「コンビニでアルバイトしての感想」という但し書きがあります。実際にそんな発送があったのか、荷物をいくつも扱いながらそんな思いに駆られたのかはわかりませんが、救援物資の宅配便を扱いながら、送る人たちの気持ちを彼が感じ取ったことは間違いありません。作業はアルバイトでもできる伝票処理。しかし、大きな願いを実現する部分として仕事が存在する。それを感じ取れることばです。

日常のルーチン作業の背景に埋もれている仕事の宝を発見する幸せを感じます。

(MBO実践支援センター代表)